

蜃気楼をテーマにした茶席づくり ～先人たちにみる数寄者の遊び心について～

日本蜃気楼協議会 木下 正博
(一般社団法人茶道裏千家淡交会魚津支部)

1. はじめに

蜃気楼に関する美術・工芸品は、2006年頃から日本蜃気楼協議会(以後、日蜃協と記す)の会員によって広く収集されるようになった。きっかけは、自身が茶会の席主をするにあたり蜃気楼の鉢や菓子皿を探し求めたこと、また、釜師に「蜃気楼釜」の製作を依頼したこと等を日蜃協で情報共有したことによる。

現在では、全国の会員によって数多く収集されるようになり、日蜃協のホームページでは50点余りのコレクションを紹介するまでになった。これら美術・工芸品の多くは、江戸後期に作られており、先人たちは日常的に生活に使用していた他、数寄者たちにより茶会などでも茶道具の一つとして利用されていたものと考えられる。

そこで、自身のコレクションを実際の茶会で使用してみたので報告する。

2. 蜃気楼をテーマにした茶会

蜃気楼をテーマにした茶会(席主:木下正博)は、これまでに3回実施した。

(1) 裏千家淡交会北陸信越地区青年部ブロック会員大会

- ・参加者 約250人
- ・期 日 2006年7月1日(土)
- ・場 所 魚津埋没林博物館・研修室
- ・蜃気楼に関する道具



- 釜 撫肩釜蜃気楼地紋(蜃気楼釜、藤田勝与 造、2006年)
- 菓子器 伊万里染付蜃気楼図中鉢(江戸後期)
- 菓子器 伊万里染付蜃気楼図中貝型皿(5枚組、江戸後期)

(2) 翠松庵茶会

- ・参加者 約100名(淡交会魚津支部会員)
- ・期 日 2013年4月28日(日)
- ・場 所 ホテル・グランミラージュ
茶室「翠松庵」
- ・蜃気楼に関する道具



- 待合床 蜃気楼絵(佐野五風 筆、昭和初期)
- 菓子器 伊万里染付蜃気楼図中鉢(江戸後期)
- 菓子器 伊万里染付蜃気楼図中貝型皿(5枚組、江戸後期)
- 釜 撫肩 蜃気楼地紋(藤田勝与 造、2006年)
- 薄器(棗) 魚津塗 蜃気楼紋(鷹休雅人・高出英次 造、2013年)

(3) 北日本茶会

- ・参加者 約350名（富山県内の各茶道流派）
- ・期 日 2023年4月23日（日）
- ・場 所 富山能楽堂 茶室
- ・蜃気楼に関する道具



- 脇床 蜃気楼絵（英一蝶画、江戸中期）
- 棗（薄器） 魚津塗 蜃気楼紋（鷹休雅人・高出英次 造、2013年）
- 香合 染付大蛤蜃気楼絵（江戸後期）
- 菓子器 伊万里染付蜃気楼図中鉢（江戸後期）
- 菓子器 伊万里染付蜃気楼図中貝型皿（5枚組、江戸後期）

3. 道具の取り合わせ

茶席では、テーマ設定が重要である。蜃気楼をテーマとした場合、全ての道具を蜃気楼にすればよいという訳ではない。全体のバランスを考え、正客及び連客の創造力をもって蜃気楼の世界に誘わなければならない。

そこで、R5. 4. 23に開催された北日本茶会を例に、会記より道具の取り

令和五年四月二十三日（日）		北日本茶会 茶筥供養		於 富山能楽堂	
				唐主 裏千家淡交会魚津支部 木下宗正	
床	鴨雲斎大宗匠筆 水明清山色				
脇	蜃気楼絵 英一蝶 画				
花	季のもの				
花入れ	朝日焼				
香合	染付大蛤				
風炉先	鴨雲斎大宗匠在判 流水腰			吉兵衛	製
釜	古天明筋釜			春奇	造
炉縁	遠山蒔絵			宗覚	造
棚	長板真塗				
皆具	浅黄交趾七宝紋 鴨雲斎大宗匠箱			翠嵐	造
火箸	鳥頭			勸漢	造
薄器	魚津塗 蜃気楼紋			雅人	造
茶杓	淡々斎作 銘 蓬萊				
茶盤	御所丸写 鴨雲斎大宗匠箱			藏六	造
菓子替	海辺の巖			善五郎	造
菓子器	有磯の風			丸善	製
煙草盆	伊万里染付蜃気楼絵 鉢				
火入	螺鈿				
	大槌焼			年雄	造

合わせについて解説する。まず、茶席の中心となるのは床（掛軸）である。茶席は、蜃気楼が発生する富山湾をイメージし、5月の新緑の山々から清流が富山湾へと流れる様子を禅語「水明清山色」で表した（※茶席での掛軸は禅語）。風炉先は流水紋、皆具は海（富山湾）の青さを表現するために浅黄交趾、点前座の中心には蜃気楼棗（薄器）を配した。そして、炉縁に遠山蒔絵を用い、富山湾から眺める能登半島の山々を表現した。主菓子については、海を薄色の羊羹で表現し、上層は有磯に吹く風を線で表し暖気と冷気を2つに色分けした。また、蜃気楼が発生するときの海面の輝きをラメで表した。その他、中国における蜃気楼の発生地「蓬萊」を銘とする茶杓、波の模様を絵付けした「海辺の巖」を銘とする茶碗、螺鈿を施した蓑盆、等々、幻想的な蜃気楼をイメージできる様に工夫した。

4. まとめ

江戸の頃には、数寄者たちは蜃気楼の意匠を様々な美術・工芸品に取り入れ、日常生活で使っていたと思われる。これまで、茶席に蜃気楼を取り入れてみた結果、総合芸術と言われる茶道の世界と蜃気楼が上手く融合できることが分かった。知識人たちは、茶道具に彼らの美意識や価値観を重ねるが、蜃気楼の美術・工芸品もその一つになったに違いない。

茶席では正客をはじめとして連客の反応は大変好評であった。今後も、数寄者の一人として遊び心を持って多くの人々に蜃気楼を知ってもらおう活動を続けていきたい。